

平成27年度
UR技術・研究報告会

特別講演

「団地の未来」

講師 東京大学教授 隈 研吾 氏



平成27年10月28日（水）

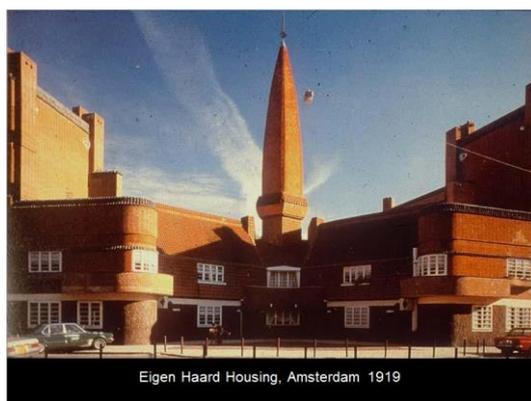
日経ホール

皆さん、こんにちは。きょうはU R 60周年という、大変記念すべき特別なイベントということで、私も責任重大だと感じております。

1955年の住宅公団からの60年間というのはまさに日本の戦後社会にとって一番の激動の60年間でもあったわけです。その社会の中で人がどんな住宅に住むかというのは最も基本の基本です。これは人間がどう生きるかということと基本的には同義なものです。住宅公団は、社会の情勢に合わせて名前も変わって、機能も変わってきて、今のU Rになったわけです。人間がどういうふうに生きていったらいいか、日本人はどうやって生きていったらいいかということの中心にU Rは絶えずいたというわけです。そういうちょっと大きなフレームワークの中で今後のヒントになるようなお話ができればというふうに私は思っています。

今日のテーマとして、ヨーロッパモデルの集合住宅、それからアメリカモデルについてお話します。それからもう一つ日本モデルの集合住宅というのがあり得るかということを皆さんと考えたいと思います。

ヨーロッパモデルというのは、基本的にはコミュニティ志向の集合住宅というのがベースです。1919年にできたアムステルダムのアインハルトの集合住宅は、真ん中に中庭があって、不整形な敷地をうまく使った計画となっております。



その後、集合住宅で注目すべき提案が出てくるのはコルビュジェの提案です。パリの「プラン・ボアザン」という計画です。タワー型の集合住宅をつくることによって緑の空間をたくさん取って、住人の生活の質を上げるということをコルビュジェは提唱したわけです。これは先ほどのオランダの中庭型ものと比較すると対照的な姿をしております。フランスではこの計画に対しては批判的な声が多かった。ただ、建築の歴史の中で言いますと、これは世界に、とくにアメリカに対して大きな影響を与えました。そういうことを鑑みると、コルビュジェは実はアメリカに対してアピールするつもりでこういう絵を描いたのではないかと、本気でパリにこれをつくるつもりはなかったのではないかと。確かにこれを本気でパリの街並みを壊してやったら、大変な批判にさらされたと思うんです。思い切ったショッキングな絵をつくって、世界に対してアピールしようとしたのがこれではないかというふうにも言われるわけです。



ドイツでは、1931年、社会主義的な政策のワイマール共和国の中で、たくさんのジートルク（＝集合住宅）を設計したのがブルーノ・タウトです。その中でもブリッツの馬蹄形のジートルクは、僕が一番好きなものです。大きな中庭を囲んで住棟が並んでおりまして、中庭の池がくぼんでいるんですね。全体の水が中庭の池に集まるようになっていて、いまで言うとビオトープになっています。鳥



や虫がいて、憩う中庭があって、これこそ夢のコミュニティのような感じで、本当に平和な気持ちになる集合住宅です。タウトは1933年から1936年の3年間日本におりました。その間、桂離宮を訪れた。タウトがジートルクの設計を通じて探し求めてきた人間と自然との調和の状態がこの桂離宮にあるということで、桂離宮の前で涙を流すという有名な事件があります。さっきの話で言うと、集合住宅の日本モデルというのがあるとすると、そういうタウトが桂離宮に見たようなものが一つのヒントになるのではないかとことも私は思っているわけでありませう。

コルビュジエは「ユニテ・ダビタシオン」という集合住宅を戦後になって実現しました。コルビュジエは戦前のタワーの構想を元にするんですけども、この「ユニテ・ダビタシオン」には、ヨーロッパのコミュニティ思想みたいなものがもう一回色濃く出てまいります。メゾネットタイプの住戸が二つずつ組み合わせられたような住居プランになっています。3階に1個ずつ中通路があるんですが、コルビュジエはこれを空



中の街路、ストリートとしてデザインしました。そこで地上のストリートと同じような人々の賑わい、コミュニティというものがこの空中の街路に生まれるということを提案しました。屋上やピロティの空間も彼はコミュニティのためのパブリックな空間だと考えました。そういうふうにして、集合住宅を通じてコミュニティを再構築することを実際の実物で実現していくわけです。

日本で、住宅公団の発足は1955年ですが、実はその前のプレヒストリーがあります。そのプレヒストリーは同潤会です。1926年、関東大震災の3年後、震災復興の住宅として同潤会が計画されました。それが住宅公団の前身、組織的にもいろんな形でつながりがあるというふうに言われておりますので、60年史と言っても、実はその前に30年ぐらい、さらなるプレヒストリーがあるわけです。

同潤会というのは、ヨーロッパの最新の集合住宅から多くのことを学ぼうという高い志でスタートしたものです。低層でヒューマンな、しかもコンクリートで火に強い集合住宅を日本でこの同潤会が担ったわけです。デ

ザイン的にも非常にレベルが高いものでした。代官山の同潤会を例にとると、配置においてはコミュニティのための施設をたっぷり取ろうという計画がされていました。おいしいものが安く食べられるコミュニティの食堂がありまして、お風呂屋さんもあって、売店もあった。いまで言えば、昭和の時代の匂いというのかもしれないんですが、そういう特別なコミュニティの空気感が代官山にはありました。また、住戸プランにおいて特筆すべきは、基本的に片廊下なんですけれども、片廊下の幅が非常に広いんですね。それはそこでちゃんと職人さんが仕事場として使えるようにしようという意図なんです。それは日本の昔ながらの都市の中に職人の仕事場があるようなストリートの再生が目的でした。私はコルビュジェのマルセイユのものよりも、同潤会の片廊下のほうがよほどストリート的で活気があって楽しかったと思うんですが、そういう日本的なコミュニティの思想がこの同潤会の中には生きていました。住戸プランも日本の土間のような空間があったり、ある意味で日本の持っているヒューマンな空間性と、ヨーロッパの新しい集合住宅思想を混血した大変におもしろい思想が、この同潤会の中にありまして、いまの時代にもヒントがたくさん隠されています。

日本において、戦後、「51 C 型」という集合住宅のモデルプランが作られました。これは日本人の住み方を変えた画期的なプランでした。ダイニングキッチンが寝室とはっきりと分離され、食寝分離、食べることと寝室が分離され、これは画期的だったんです。関東大震災の震災復興住宅として計画された同潤会はそうっていない。コンクリー



トの外観でも、そのあたりは昔ながらの日本でした。食べたところに布団を敷いて寝るみたいな生活のスタイルを前提にしていたのです。それがこの「51 C 型」になって、はじめて食寝分離という考えが出てきました。この「51 C 型」をつくった中心のメンバーだった先生が私の恩師の 1 人、鈴木成文先生です。東大の建築学科の計画学の主任で、私は直接いろいろごかれました。その先生たちが中



心になって作った「51 C 型」は、アメリカ型の近代家族と呼ばれる小家族を前提とする、個人の自立を促進する集合住宅でした。そういう形で、戦後、日本はヨーロッパ型からアメリカ型へと少しずつ政策の舵を切っていく。文化的にもアメリカの文化のほうに日本人は引かれていくという戦後という時代を、ある意味で象徴しているのがこの「51 C 型」のプランです。

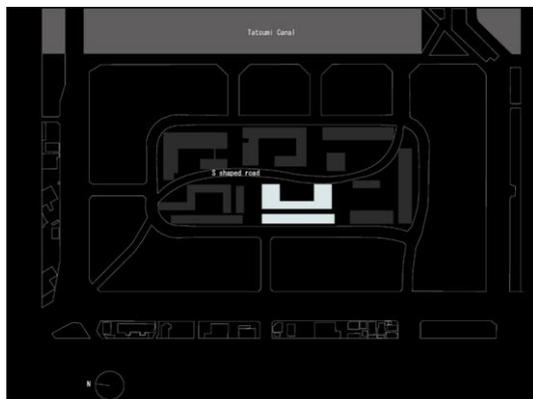
URの八王子の研究所に行くと、51 C 型が実際に再現してあり、空間としてもいいんですよ。昭和レトロと一言で言っては語り尽くせないようなよさがあります。中に木のフレームですとか、襖ですとか、木枠にガ

ラスをはめてあったり、実にヒューマンスケールで温かい感じ。アメリカ流の思想が入ってきていると言っても、ちゃんと日本の文化、日本の生活というものを考慮しながら、日本に合わせた形で翻訳してあるすばらしいものでした。これは日本の集合住宅の歴史の中でも画期的なモデルとして、その後、いろいろなところでそのバリエーションが出てくるわけです。

1958年には晴海アパート、丹下先生のちょっと先輩の前川國男先生の設計のもので、これも一部が八王子に保存されています。八王子のURの研究所は本当に宝物だらけだと私は思っているんですけども、実際の空間がそこで体験できます。晴海アパートも外から見ると、コンクリートの箱だなと思われるかもしれないんですが、中に入りますと、空間が本当にヒューマンで、生活に対して心配りがしてあって、すばらしいものです。

大きな団地をつかっていく住都公団の歩み。その大きな団地の中に、集会所をつるとか、公共空間を充実させよう、緑を充実させようというヨーロッパ流のコミュニティの思想と、それから「51C型」以来のアメリカ流の個人の自立、考え方、それに木のフレーム、障子、そういう日本的なテイストが加わって、1970年にたくさんの日本風な団地ができていくわけです。

その後、もう一つ、大きな展開があります。これは私自身も一部関わった東雲のプロジェクトです。東雲の三菱倉庫の跡地のウォーターフロントのまとまった土地を、六つのブロックに分けて、6人の建築家がそれぞれを担当して、その真ん中にS字型のヒューマンな道を設けたのがこの東雲チャンネルコートでした。



この東雲の考え方を一言で言うと、20世紀後半に住宅の定義が変わった時代の象徴です。住宅の定義というのは、戦後、「51C型」から1970年の洋光台の団地のときも、基本的には住宅というのはファミリーのための住処、近代家族という核家族のための住処でした。これは20世紀のアメリカの考え方です。アメリカは住宅をそういうふうに定義することで20世紀の繁栄を手に入れたと



いうふうにも言われます。これはヨーロッパの幸せの定義とはちょっと違います。ヨーロッパの幸せの定義は、小さな家族で住むことではなく、大人数で住むことです。多世代で住むとか、近隣のコミュニティと一つになって住むことでした。アメリカは家を手に入れて、小さな家族で住めば幸せになれると信じていました。

20世紀の末にこの図式を見直す新しい動きが出てきます。一言でいえば家の解体です。家というのは

小さなファミリーのための住まいではなくて、いろんな使い方があるという考えが出てきました。S O H Oというのはスモールオフィス・ホームオフィスの略ですけども、そういうS O H O的な使い方をしてもいいかもしれない。多代的で住む大きな器としての家があってもいいかもしれない。そういうふうにして家の定義をどんどん拡張していかないと、これからの少子高齢化の時代には対応できないという大きな動きが20世紀の後半に起きてきます。そういう新しい動きを反映したのがこの東雲の公団のプロジェクトでした。

その後、住宅概念の拡張、定義の見直しの後にどういう時代が来るかということが今日のメインのテーマです。

洋光台はそういうテーマを背負っていくわけですが、一つの可能性はシェアハウスです。多様な人が集まって、家族以外の人も集まって、そういう人を受け入れられるような懐が深いゆるい集合住宅、これがシェアハウスです。こんな集合のあり方もいま世界で大きなテーマになっております。

私自身、大家さんとしてやってみたのが「SHAREyaraicho」です。妻であります篠原が設計したんですが、2年前の建築学会賞をもらった作品です。2年間経過し、いろんなおもしろいことがわかりました。おもしろいのは外国人の人気の高いということなんです。

日本の都市は、実は開かれているようで、まだまだ閉じた構造をしております、外国人はなかなか賃貸住宅を借りられない。それから高齢者の一人者もなかなか借りられない。企業に勤めている普通のファミリーは借りやすいけれども、そのルートから外れた外側の人は、家すら借りられないという問題があります。このシェアハウスをも



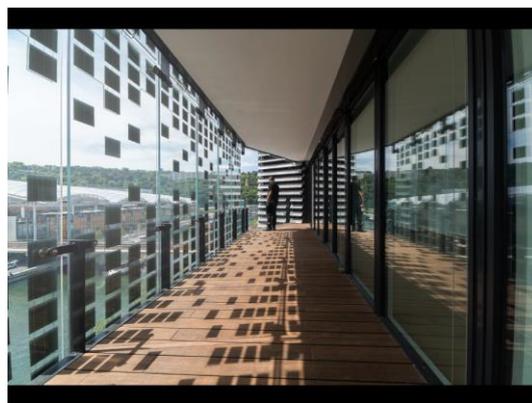
っと開かれたようにするには、高齢者の住処としてだんだん変化していったらいいなというふうにも考えていますし、これと福祉の機能を両立させるものができるかということも考えています。

シェアハウスと福祉を両立させるというのも全国でいろいろおもしろい例が出ています。福祉との組み合わせで注目されている「シェア金沢」。福祉施設とシェアを両立させて、それもリノベーションで、捨てられた古いお寺を改装してシェア・プラス福祉施設に変えている例です。

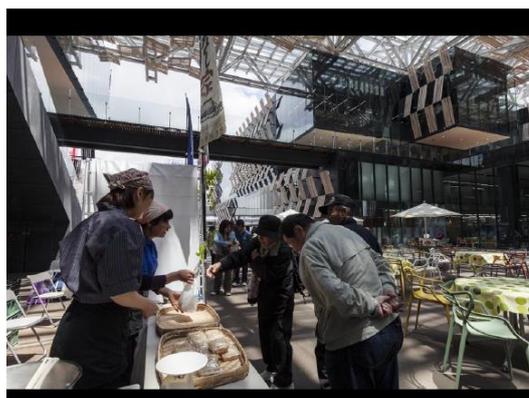
シェアというものは、基本的な住宅の定義をし直すだけではなくて、社会をサポートする施設として住宅を再定義することです。シェアは単にかっこいいライフスタイルの場所というのではなくて、社会をサポートする住宅という、住宅の基本的なあり方に返るものです。

もう一つ注目しているのは環境を再生するための住宅です。住宅というのは実は一番環境に対して電気を食って、二酸化炭素を出して悪い働きをしているといろいろ言われてきてました。そのイメージを覆せないかということも重要なテーマです。リヨン市はフランスの中で環境の

先進都市で、そこで私どもがコンペで選ばれたのが「H I K A R I」というプロジェクトです。基本的には住宅とオフィスの混在です。ファサードが透過型の太陽光パネルとなっていて、太陽光パネルの後ろ側のバルコニーはサンルームになっています。太陽の軌跡を計算して、スリットの形状を決め、どの部屋にもまんべんなく光が入るようにしました。それで「ヒカリプロジェクト」というふうに名付けたわけです。



もう一つのテーマは、市役所がコミュニティの核になるということです。長岡市の市役所のお話を最後にしたい**と思います**。これは土間のある市役所。もともとは郊外にあった市役所を街の真ん中に持ってきて、市役所によって街の通りを活性化しようということを市長が考えてつくった市役所です。新幹線の駅から直結した空間をつかって、コミュニティの中心にしました。子供たちがみんな宿題をしに来ている。家にいるより楽しい市役所というのも不思議なんです。お年寄りたちもたくさん集まってきています。



こういう考え方は、ヨーロッパ流、アメリカ流とも違う日本流の形です。同じようなコミュニティの再生が洋光台でできたらいいというのが私どものいま考えていることです。洋光台プロジェクトは平成27年3月新たに「団地の未来」プロジェクトを立上げ、その記者発表でロゴを発表しました。私がこのプロジェクトは絶対成功すると思ったのはこのロゴを見たときです。「団」という字がプラスとアイデアというものに翻訳されていて、世界の人、だれが見てもわかる。でも、同時に日本人が見たらもっとおもしろい「団」の字になっているということで、このプロジェクトの成功を確信したわけです。



洋光台団地が建設された当時、1970年というのはどういときだったか。たとえば北欧のフィンランドのアルヴァ・アアルトの建築が注目され始めました。ただ高い機能的な住宅をつくるというのではなくて、微妙に角度をずらしたり、緑の植え方によってもっとヒューマンなスペースをつくっていくという時代。そういう1970年代のいいところがこの洋光台の中にあります。

住戸については、畳があって、欄間があって、襖があって、先ほどの「51C型」でもそうですけれども、ちゃんと世界の新しい住宅の考え方を取り入れながら、それを日本人の生活に合わせて翻訳しているということです。そういうDNAが生きています。それを見て、佐藤可士和も「かっこいいじゃん」と言ってくれた。

まず、はじめに取り掛かったのが、外壁修繕。外壁をみたとき、私は「この屋外機をどうしたらいいのか」と頭を抱えました。空調の屋外機ですから、なくすわけにはいかないです。でも、この室外機を逆手に取って、デザインの一番の目玉にしてやれば、それは一種の大逆転ができるのではないかとこのように考えました。木目をアルミに直接プリントするという日本の一番新しい技術で、プリントの精度が非常に高いので本当の木みたいに見えます。何種類かのプリントをうまく混ぜて、均一な感じにならないようにして屋外機の前につけました。「木の葉パネル」と呼んでいます。外壁の色は、白く清潔な感じにしました。

広場も、パブリックスペースをちゃんと充実させよう、そこには気持ちのいい日常的なショッピングのスペースです。70年当時の貴重な設計思想を踏襲しながら、広場をいまの時代に合ったものに、最小限のお金で改修します。ちょっとずつ勾配をつけていって、広場のアーケードの下を歩いても楽しいものにします。階段部分については値段の安いリサイクル材で、木の感覚、自然素材の感覚のあるものに変えています。既存のアーケードになっているところは、アーケードの上も歩けるように複層のデッキにします。2階をテラス式のテナントのスペースにし、そのテナントを、単なる商業ではなく、塾をやる人がいてもいいし、福祉のことで使う人がいてもいいし、そういう複数の機能をミックスした街らしさを作ります。

広場は洋光台の駅から洋光台北団地方面に行くに連れて勾配がついています。上がっているレベルからだと、スムーズに2階のデッキに入って、そこから下りていって駅に行くという通路ができます。素材は自然な感じのリサイクル材です。その中に、街の掲示板ですとか、井戸端ユニット、だんだんベンチ、街角カウンター、縁側プランターといったような装置、こういう小さな装置で、街を再生していこうという考え方です。



団地の魅力をリサーチ (洋光台団地ぶらぶら散歩 H25年12月)



現状の広場風景



改修後の広場風景

団地の未来プロジェクトは、いま改修の部分を取りあえず僕が手をつけ始めて、これからはいろいろなデザイナー、事業者にどんどん入っていただくことで、より輪を広げていって、社会的に影響のあるものになっていくでしょう。北集会所のアイデアコンペでは、団地の未来のアイコンとなるアイデアを募集します。これがスタートしています。それから防災、商業空間、C C ラボ、コラボレーション。フィルムコミッションも、まだ名前を出させないですが、すごいおもしろい映画をここで撮影するというプロジェクトも進んでいます。図書館、カーシェアも展開予定になっています。

さきほどのフランスのリヨンの「HIKARI」プロジェクトは、ヨーロッパの中でも一番進んでいる環境住宅の事例です。しかし、リヨンのものより洋光台のほうがはるかに先をいっていると感じるんですね。洋光台がおもしろいのは、大きな広場があって駅に直結していることです。リヨンのプロジェクトは洋光台のようなまとまった広場がないので、できることは限られていました。敷地の前に川があるという点ではいいんですけども、パブリックスペースと緑の量では洋光台が上です。だからこそ可能となる新しい多様な活動が「団地の未来」というプロジェクト名のもとに進んでいきます。

20世紀の初めにまずヨーロッパから集合住宅の新しい波が始まって、それからアメリカ流の個と私有を原理にする集合住宅の波がおきました。日本の団地はヨーロッパともアメリカとも違う、もっとフレキシブルでやわらかい集合住宅です。この団地を21世紀にあった形で再生させようという洋光台プロジェクトは間違いなく世界から注目されるでしょう。日本的なテイストと住まい方によってヨーロッパ、アメリカを超えた新しいフェーズへと集合住宅が向かっていくのです。そういう点で洋光台に大変期待していますし、URの今後ということに私は大変大きな可能性と期待を感じているわけです。

きょうはどうもありがとうございます。(拍手)

(了)